りしているのでは駄目で例えば、雪が降り積ったら、宮様の事を放って外に飛び出して自分達が面白くて夢中になって雪合戦を楽しむのが本当の忠義（その時代の言葉）なのですよ」と私の心得違いをいましめて下さいました。このお言葉の中にこそ先生の御理想がうかがわれるとしみじみ悟らせていただきました。当時から長い間先生は、宮中に伺候して皇后陛下に心理学の御講議を申上げられたともれ承って居りますが何れの点から考えましても感慨無量の思いが致します。

先生の思い出は書いても書いてもつきません。地方に出ましてからは先生が御講演にお出で下さることをどんなにお待ち申上げましたか、又ラジオの放送をどんなに嬉しく承った事か、又毎月の「幼児の教育」の先生のお言葉をどんなにおなつかしく読ませていただきました事か、あゝ、しかし、今はもうそれも叶いません。私共はただただ先生の御指導を一生の柱として、生のある限り及ばず乍ら、世の為人の為に、又幼児教育に微力を棒げさせていただき、先生の御高恩の万分の一にお報いさせていただきたいと誓うものでございます。

× × × ×

人間倉橋惣三先師

大塚喜一

日本の保育界の恩師倉橋惣三先生が、フレーベル先生の誕生日に、久遠の故郷への道筋を遺して還られた。その翌日、四月二十二日の朝六時過、ラジオが先生の御急逝を告げた時僕は前学年の収穫の成果を謄写原紙一枚に刷ったものを用いてその日の第一、二時限の教育哲学の講義（保育二年生選択科目）の幕開けをしようと構えていた際であった。

終始一貫して幼児の純情に引きつけられ、そこから新に出直して保育者自身とその子とが一体一如となる、そのように純一になり切った極致が、方法や手段の入るすき間のない保育の真諦であり、人間を再創造する楽園である。将来保母たるべく志を立てて勉学して居る若い女性達から入学当初に提出させた立志の動機を記したものの中に、倉橋先生がこのよ

うに目指して居られた純情の交感を体得した手記を見出したので、それを橋として先生の御意図を想い起して行きたい。

○

子供を本当に心から愛する事によって、とても大きな信頼を受ける。これは私が体験した大きな力であった。その信頼は、慰めになり、又力でもある。献身的に何事もすれば、子供にもそれが伝わると云う事も、しみじみ実感せられた。

○

『就学前の教育』と題された岩波講座『教育科学』抜刷は先生から小生に送って頂いた貴重な御力作である。特に人生の基本教育として伸びる力の根本たる自己発展力を養う事に由り、就学後の分化した教育方法でなく渾一的な生活活力を充実せしめる任務がある。そこを先生は「生活による教育」と云い表わされた。「真に彼の生活と云い得るものが彼の全体の活動であり、その極致として彼そのものを捧げ尽すものである事は、誰も知る事実である。而して其の生活は人間事実として、最も具体的なものである」と述べられた実質が、方法として前提せられない直接の感応を呼び起して「(保育者自身の)生活の持つ動き、力、換言すれば強く生活されて居ると云う事が、幼児に及ぼすところの誘発的効果こそ、就学前教育法として重要なるものである」との成果をもたらすならば、生活の中軸が一貫して人間同志の交りを全人格の結合へと高め上げて行く一筋道が歴然と見出される。そのように純一に生き切る力が形にかかわらず唯一心に己を尽すうちに伝わって行く有様を、特に印象深く学び得たのは、大正十三年七月、大阪に於て「幼児教育原論」の講習を受け、又、昭和七年八月十六日から五日間、朝六時半から七時までJOBKから「親と語る」の放送をお聴きした時であった。前者は今後幼児教育に関する問題の解明の指針とすべき必要を感じて謄写製本して先生にも御覧頂き、小生出身の堺第一幼稚園の保母方とも学び合い、昭和五年に平安女学院保育科に奉職以来は「教育学」のテキストとして毎年講述して来たものである。先生は先ずフレーベルの若き日に直観せられた幼児の自発活動力が、我々を幼児教育者たらしめる原動力であると説き起された。この幼児が本来有する自然に副うていつくしみはぐくむ保育方法の原則として挙げられた。

具体　相互　共鳴　機会捕捉

の様相は、幼児を保育する方法の適否を批判する根本態度を諒解し会得せしめられる「原論」である。殊に、他の時期や場面と対比して、幼稚園と云う特定の教育の施設が幼児達の生活を保育する使命を達成するために、如何様に運用せらるべきであるかを懇切に解明していられる。原理を実践して行く道筋を歩ませつつ、自分と云う心のへだてのない純情に共

感して尽きない生活の源泉から湧き起り溢れ漲る喜悦・感激は、最近発行せられた「子供讃歌」に至って最高調に歌い出された感がある。この好著が先生の偲び草となるであろうように編まれてあるのは本当にうれしい。この追悼号に拙文を依頼せられた文面に「故先生の御生前、特に御親交の厚くあられました」と記された恩師の御風格や御誨語が、本書中に「彼」と名付けて語り合って居られる各地の人々との人間交渉の中に読めば読む程鮮明によみがえって来る。その源に尋ね入ってこそ、編集企画せられた人間倉橋惣三先師の「久遠のこども」（昭和二十八年十月五日夕、京都山端平八にて御筆を頂き「欣童」と雅号せらる。本書八の終参照）の全人格を象徴する一員たらしめられよう。本誌に寄稿せられる諸師とともに、この「子供讃歌」の読後感を語り合い、その交感の場に読者も本誌を通して共に住ましめたい。前述の「幼児教育原論」を「教育的惜心」から発動せしめられた源が、本書の三二頁に見出されたことと、「家庭教育行脚」の中に

「いろいろの違いを知って、その根にある同じものの深さが味わえる」（一七〇頁）

と達観せられた偉いさを讃えて、我等も亦「母と語る」道を先生に従って歩まう。（三〇、五、一四、一一、三〇）

（平安女学院短大助教授）

噫、倉橋先生

菊池ふじの

昭和三十年四月の二十二日、朝七時。

朝刊をみていた家の者は

「おお！　倉橋先生がなくなられたぜ」

と、おどろいて私に知らせてくれた。

「え？」と私もおどろいてとんでいき、その新聞をうけとって、信じられない気持でさがした。

……幼児教育の先覚者……中野千光前一〇番地……

もううたがう余地もない。倉橋先生のことなのだ。

私は、ええ！　としばし呆然として声も出ない。

「四月の二十一日午後三時五十分」

昨日のこの時間には、まだ幼稚園にいて、しかも及川先生山村先生といっしょに、先生の御近況のお噂をしていたとき